

神戸市立小磯記念美術館で開催された特別展「関西学院の美術家～知られざる神戸モダニズム～」(7月20日～10月6日)で、関西学院出身の洋画家(大森啓助、野口彌太郎、神原浩、吉原治良、児玉幸雄、片岡真太郎、石阪春生)、創作版画家(北村今三、春村ただを、川西祐三郎)等の作品約170点が紹介されました。その多くは、在学中、絵画部弦月会で活躍した人たちです。先輩方の佳作を目のあたりにした弦月会の後輩が感想をお寄せくださいました。

◆ 弦月会最良の日

絵画部 OB 弦月会・事務担当 佐々文章(平成元年経済学部卒業)

例年にも増して猛暑に見舞われた今夏、神戸市立小磯記念美術館で開催された特別展「関西学院の美術家」は、私共絵画部弦月会の関係者にとって大きな意義のある展覧会であった。

1915(大正4)年頃に「弦月画会」として活動を開始した絵画部弦月会は、100年近い歴史の間に数多くの美術家を輩出してきた。1950～60年代には偉大なOB吉原治良さん率いる<具体美術協会>の活動が日本の美術シーンを席卷、海外にも紹介され、50年経った今なお国内外の美術館で回顧展が開催され、その活動が再検証されている。<具体>の活動には関西学院出身者も数多く参加し、その18年にわたる活動があまりにも鮮烈であったが故に、「弦月会の活動＝吉原治良さんのもの」と解釈されることが多々ある。よく言えば<伝統にとらわれない自由奔放なアート>、悪く言えば<基礎技術抜きの発想優先型破天荒アート>である。「他人のまねをするな」「見たことのないものをつくれ」という治良さんの言葉は、新しいもの好きの関学生の気風とも絶妙にマッチし、時代を超えて現在の学生部員たちにも受け継がれ、弦月会の精神的バックボーンとなっている。



その吉原さんの活躍の前には弦月会の礎を築いた先輩方がプロ並みの活動を行った時代があり、学生美術界でもトップレベルの活動は『西の関西学院弦月会・東の慶應義塾パレットクラブ』と並び称された。今回の特別展は、我々関係者でも全容をよく知らない1910～40年代に活躍された先輩方にスポットを当てた歴史的な展示となり、サブタイトル<知られざる神戸モダニズム>の通り、まさに「知られざる」作品をよくぞ見つけ出してくれたという、感謝の思いでいっぱいだった。

関西学院に美術教育専門の学部学科が設置されたことはなく、弦月会に絵画技術を指導する教員が存在したこともないが、いつの時代も学生たちは独自の努力・工夫でその才能を研鑽し、美術系大学に劣らぬ活動を続けてきた。なぜか関西学院出身者に美術家として活躍している人が非常に多いという、知る人ぞ知る美術界の七不思議の一つ(?)を、目に見える形で世間に知らしめてくれたわけである。

7月19日に行われた内覧会には、矢田立郎神戸市長、ルース・M・グルーベル院長、井上琢智学長はじめ多数の学院関係者・美術関係者が詰めかけ、華やかな雰囲気にも包まれた。私も学生部員2名を連れて出席させていただいたが、開会セレモニーでの「絵画部弦月会は長い歴史と伝統を誇るクラブで、このような素晴らしい画家を輩出…」という祝辞には、誇らしいやら気恥ずかしいやらすぐたいたい気分になり、隣の学生部員を見ると同じように微妙な表情をしている。私の在学した頃から弦月会は「芸術家気取りの奇人変人が集まった、訳のわからない活動をしている集団」として学生課からマークされており、多くの部員は真面目なのだが、たまに“規格外”のトンがった人物もおり、アトリエ周辺に作品か廃棄物か判別つかない正体不明の物品を放置したり、寒い時期に酒を引っかけて講義に出るという不届き者がいるなど、“要注意クラブ”としてたびたび指導を受けてきた歴史がある。それがこんなハレの場でお褒めの言葉をいただくとは…という何とも微妙な気持ちと、私と学生部員のニヤつきの表情となったわけである。

何はともあれ、出品作家の一人である石阪春生さんもお見えになり【写真次頁】、多くの弦月会OBが集まった内覧会は、誇らしい気持ちがそこかしこに溢れる『弦月会最良の日』となった。

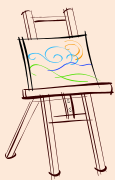


展覧会場に入ると、大森啓助・野口彌太郎・神原浩の“弦月会創立初期ビッグ3”の味わい深い名作が並ぶ。それに堀口泰彦さんの大作《学院風景》【写真上】。上ヶ原キャンパス初期の牧歌的風景を見事に描いたもので、作者の名前は知らなくても「時計台の階段踊り場に飾られているあの風景画」として、おそらく最も多くの関学生の脳裏に刷り込まれた絵画ではないだろうか。もはや時計台の壁面と一体化した感のある作品だが、画面が非常にきれいになって展示されている。他の作品もたいへん美しい状態だが、今回展を前

に多くの作品に修復作業が施されたと聞いた。絵画作品は時間の経過と共に絵の具が退色し、塗膜についたホコリが原因でカビが発生するなどして当初の鮮やかさを失う。修復は費用と手間のかかる地味な作業であるが、展覧会準備には欠かせないプロセスであり、携われた関係各所の方々と費用を捻出していただいた学院関係者に感謝したい。

私の個人的な感想としては、北村今三さんの《阪神パーク》(1939年頃作) を見る事ができたのが一番嬉しかった。10年前に閉園され今は「ららぽーと甲子園」となった阪神パークを題材にした木版画の小品で、遊園地の楽しさと躍動感が画面にあふれる素晴らしい作品である。ローレックの名作《ムーラン・ルージュ》の影響を感じさせる画面構成にはほのぼのとした遊び心があり、子供の頃に何度か行った記憶がよみがえるようで長年見たいと思っていた。北村今三～春村ただを～竹中郁の一連の作品展示は、90年前に原田の森で出会った先輩方の厚い友情が感じられるような気がして、何故か涙がこぼれた。

100年近い歴史を誇りながら、絵画部創立初期の先輩方の活動はこれまで伝え話程度にしか聞いたことがなく、体育会団体のような戦績のない究極の個人芸の集団である絵画部が、その歴史を目に見えるかたちにするのは大変難しい。金井紀子さん・池田裕子さん、二人の女性の長期間にわたる準備の積み重ねと情熱の結晶として素晴らしい展覧会になり、2ヶ月半の会期中に私は何度も美術館に足を運んだ。大賑わいする展覧会ではなかったかもしれないが、展示室で先輩方の作品と静かに対峙するのは本当に幸せな時間だった。20才前後のころは古い時代の芸術作品を見るのが大嫌いだったが、この年齢になると自分も歴史の連なりの中に存在していることを痛感する。弦月会の若い学生部員たちも、クラブに脈々と流れる“何か”を感じてくれたのではないだろうか。



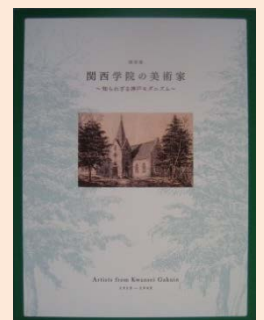
◆ 曲者の伝統と輝き

絵画部弦月会・部長 梅野美貴(文学部3年)

今回の展覧会、正直に言えばそんなに期待はしていませんでした。展示作品はどれも昔に描かれた作品で、正統派の、悪く言えば古くさい作品ばかりで退屈しないかなあという気持ちで「関西学院の美術家」展に行くことになりました。ところが展示を見ると、古くさいどころか現在の私が見てもとても魅力的で生き生きとした作品がたくさんあり、いい意味で予想を裏切られました。むしろ正統派の作品の方が少ないような気がします。風景画でも野口彌太郎さんの《那智の滝》は両側に謎の？青いモヤモヤがあったり、吉原治良さんの具象画《潜水夫と犬》では「何でそのモチーフでその組み合わせ？」という、一癖あるひねくれた作品が結構あって「今も昔も弦月会って曲者がいるところなんだな」と思いました。弦月会部員というのは多くの関学生がする王道の行動(例えば中央芝生に行くとか…)を軽視している節があるのですが、もしかしたら100年前に活動が始まってからすでにそんな感じで、今の部員の中にも絶対にいる、ちょっと斜に構えたひねくれものが部活動に参加していたのかな?と考えると、世間的には美術の大家で近寄り難いみたいと言われていても、すごく身近で親近感が湧いてきます。時代は違っても集まってくる人間は似た者なんだと思うと、血の繋がりはなくても自分たちの“ご先祖様”みたいで嬉しく感じました。

しかしそう思う反面、やはり展示作品は「上手い」とか「すごい」とか私が表現しきれないものがたくさんあって、圧倒されたのもまた事実です。学芸員の金井紀子さんの話にもありましたが、それは神戸という当時からモダンな土地の影響であったり、美術系大学ではない関西学院という文学や経済学を学ぶ学校の芸術家だからこそ、独特のセンスのようなものが培われたのだと思っています。

それから「アトリエ」という場所は重要で、今でも弦月会の活動拠点なのですが、学校からちょっと独立した所で仲間と過ごす何年間かは、絵の技術向上だけではなく、得難い貴重な経験を授けてくれます。友人と話したり、一緒にご飯を食べたり、作品制作に打ち込んだりという日常が、後々思い返せばとても大事で今の自分を作っていて、そのような「アトリエ」という場所があるからこそ、関西学院という普通大学からたくさんの芸術家が世に出ていったのだと私は思います。これは自分自身にも言えることですが、いつかそこを出て行かなければならないことが、より一層その経験を輝かせていて、展覧会場に展示されていた先輩方の写真などを見ると、その一瞬が詰め込まれているのだと改めて感じました。



特別展図録(¥2,000)は
小磯記念美術館にて
引き続き販売中
☎078-857-5880

特別展「原田の森の青春譜—神戸の近代化と関西学院—」Ⅱ部「躍動」
神戸文学館にて12月24日まで開催されています(水曜休館)